

埼玉育ちのグローバル人

つながりが繋いだ世界

第2回 「ບໍ່ບັນຫຍັງ (穏やかな) ラオライフ」

大宮アルディージャ U-12 コーチ

遠藤 竜助さん



埼玉県マスコット「コバトン」



タイトルの『ບໍ່ບັນຫຍັງ (ポーペンニャン)』とは、ラオス人がよく使う言葉です。「問題ない」とか「大丈夫」という意味があり、沖縄の「なんくるないさー」と近い感じがあります。今回はラオスで活動した際の失敗談&成功体験などを書こうと思います。長くなりますが、お付き合いください。

◎ປະເທດລາວ (ラオス)

ラオスは東南アジアで唯一海に面しておらず、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、ベトナムに囲まれた内陸国です。ラオスの面積は日本の本州とほぼ同じ大きさですが、国土の約70%は高原や山岳地帯のため、人口は約700万人で埼玉県の人口とほぼ同じです。ご年配の方が旅行に来られると、豊かな自然と建設中のビルとが入り混じっている風景とラオス人の穏やかな人柄から、「昔の日本みたいで懐かしい」と高度経済成長期の日本を思い出すようです。



メコン川と夕日

そんなラオスへ到着した初日の夜、まず降り立って思ったこと…。ラオスは明るい！

私の中で「発展途上国の夜は暗い」という勝手なイメージがありましたが、全く違いました。ラオス国内には中国雲南省から流れるメコン川が南北に1500km 縦断しており、この豊富な水力資源を利用した発電事業により、電力を隣国であるタイに売っているほどです。田舎は暗いところもありますが、首都ビエンチャンの夜はインフラが整っていました。

食事はタイ料理のように辛い物が多いですが、ベトナム料理や中華もあるので食べるものには困りません。さらにフランスの植民地だった影響から、フランスパンも安く手に入り、日本と変わらない食生活ができると感じ、ラオスで安心して生活していけるなと思いました。

◎THE 発展途上国あるある

1ヶ月の語学研修を終え、いよいよ配属先であるラオスサッカー連盟（通称 LFF=Lao Football Federation）へ。これからどうなるのか期待と不安を胸にいざ行ってみると…。何も無い。

職場に私の机も準備されていなければ、カウンターパート（二人三脚で一緒に仕事をしていく現地の職員）もいない。現場の職員に何も伝わってなく、私が今日から配属ということ全然知らないようでした。そういったことは発展途上国ではよくあることだと聞いていましたが、まさか国の機関である配属先でも同じことが起こると思っていませんでした。さらに外国人が職員でいることも珍しくない職場なので、私への興味もなし…。

挙句の果てには、事前にやってほしいと言われていた仕事は準備が整っておらず実施不可の状況。



ラオスサッカー協会

ラオ語はまだまだできないし、私自身英語も得意ではない、さらに英語はラオス特有の発音（日本人のカタカナ読みで英語を話すのと一緒）なので、私は為す術がなくなりました。

でもこの何もない状況、実は私の望んでいたことでもあります。教員をやっていた時、いつも何か用意されたものに対して仕事をしていたように思うのですが、私は一から仕事を創ることができる人に憧れていました。ラオスに来ていきなり成長できるチャンスに巡り合えたのです。もちろん不安もありましたが、この状況でできることといえれば…。そう、私にはサッカーしかありません。

毎日職場のグラウンドに顔を出し、積極的に声をかけてみました。職場でもノート片手に自己紹介をし、職員の名前を聞いて回っていたのを憶えています。そんな中、職場でサッカーの試合をやることになりました。もちろん言葉をちゃんと理解できていないので、本当に試合が始まるのか、自分もプレーに加わるのか、頭の中は「???」だらけ。しかし、いざプレーヤーとして試合に参加してみると、言葉は通じなくてもルールは同じ。アイコンタクトやボディランゲージでイメージを共有し、ゴールという同じ目的に向かってボールを運ぶ。そして協力してゴールした時の喜び。改めてサッカーというスポーツは言葉の壁を取っ払ってくれる素晴らしさがあると感じました。これを機に一気にコミュニケーションを取れるようになり、私が職場の人たちに認められた瞬間でもありました。

しばらくすると、毎日顔を出していたラオスの

プロリーグチームからアシスタントコーチをやらなかったかという誘いを受けました。ヤングエレファント FC（ラオスは象が国の象徴でもある）というチーム名で、U-19 のラオス人と外国人選手で構成された若手を育てるためのチームです。ラオスに来てからはゼロからのスタートでしたが、なんとか自分で仕事を作ることができ、言葉もだんだんできるようになってきたのを実感するようになってきました。

ໂປ່ນນຮຸ່ງ ລາອາຍໄຟ (穏やかなラオライフ)

生活、仕事ともうまくいき始めていた時、サッカー教室のトレーニングメニューを任されました。作成する上で人数、年齢、レベルなどある程度情報が欲しいなと思い、同僚に質問しましたが、全て分からず…。

こういう時にはいつも「ໂປ່ນນຮຸ່ງ! (ポーペンニャン)」大丈夫! 問題ないよ! と言われます。打ち合わせをやりたいたいと言っても、「今忙しい」、「やっぱりできない」などと流され、当日の朝に。集合時間にも遅れてくる同僚たち。不安に思っていたところ案の定、人数、年齢、レベルなど予想していたものと大きく外れ、集まった選手たちには難しすぎるメニューになってしまいました。

頭にはどうしたらいいか浮かぶものの言葉が出ず、選手が戸惑い止まってしまったり、バタバタしてしまったりと大失敗。こんなときも同僚は「ໂປ່ນນຮຸ່ງ (ポーペンニャン)!」良い意味で助けられました。ラオス人は失敗ととらえていなかったため、「どうなったらより良くなるか」という観点でミーティングを行い、計画的に取り組んでいく必要性を感じてもらいました。そして、その後のサッカー教室では徐々に改善していくことができました。

今回のことに限らず、ラオス人の生活を見ると「ໂປ່ນນຮຸ່ງ! (ポーペンニャン!)」という言葉があるから、ラオス人はポジティブに物事を考え、失敗を恐れず、何事もチャレンジし、何でも自分でやろうとするのだなと思います。

日本人の多くは失敗を恐れ、物事に取り組むと

きに遠慮しがちです。教員をやっていた時に生徒に「失敗を恐れずチャレンジしよう」と言っていた私ですが、言葉の本当の意味に気付かされたのは現地でラオス人たちとの出会いがあったからだ実感します。

◎積み重なる経験

ヤングエレファント FC でアシスタントコーチを続けていると、監督やオーナーから「遠藤も試合に出るか？」と言われました。いつも選手と一緒に練習しながら指導していたので、それを見てのオファーでした。私はすぐに JICA に相談し、お金をもらわない約束で了承を得て、初めてプロ選手として試合に出場。今までは外から見ていたプレーでしたが、中に入って一緒に動くことで、ラオス人の長所と短所がより明確になりました。ラオスのトップリーグであるラオプレミアリーグでのアシスタントコーチ、そして選手としての経験は、その後の指導に大きく役立っていきます。

配属され1年が経とうという時、土日にサッカースクールが立ちあげられ、U-14の指導を任せられました。これまでの経験からラオス人に合った指導を考え、毎週の指導にあたりました。言葉が通じないこともあります。初めてラオスで継続的にメインで指導できる場が持てたことはとても嬉しく、それ以上に楽しかったことを憶えています。同僚が私のトレーニングメニューを取り入れてくれたり、またメニュー構成のアドバイスを求められたり、多くの人にラオスでの仕事を認められ始められました。



ラオプレミアリーグでの選手出場

◎海外遠征

U-14 ラオス女子代表が日本遠征へ行くという話が出てアシスタントコーチとして遠征に帯同することがありました。3月の御殿場はラオス人が経験したことのない気温でした。そのような慣れない環境、慣れない食事、サッカーのレベルもあってか、全敗でラオスへ帰国。しかし、他国で戦う難しさを経験できたことはラオス人にとっても、私にとっても良い経験になりました。



U-14 女子チーム日本遠征



ラオスの国旗とともに

配属されてから約1年3ヶ月、様々な経験を経て、U-14 ラオス男子代表の監督を任せられ、ブルネイへ行くことが決定。

セレクションから全てを任せられ、私はラオス人のチャレンジ精神を大事にし、選手の自主性を重んじながらトレーニングをしていきました。例えば時間を守ることにしても、ただ「大事だから守れ」ではなく、「なぜ守らなくてはいけないのか」ということを伝えました。ラオスでは許されるかもしれないけど、外国では許されず、集合時間に間に合わなければ不戦敗もあること、団体行動なので一人が遅れると全員が待たなければならないことなど、理由を明確にしました。その上で選手自身に集合時間、ウォーミングアップの開始時間などを決めてもらいました。自分たちで決めることで頭に入るし、守ろうとします。

サッカーに関してもなるべく選手自身に促しました。なぜなら監督はプレーせず、選手がプレーするからです。サッカーに正解はなく、あるとするならば「ゴールを奪うこと」、「ゴールを守ること」です。一瞬一瞬の判断は選手がしなければならぬので、私の意志、考え方などの判断材料を与え、選手自身に決断を促しました。アシスタントコーチのラオス人もこのようなやり方に賛同してくれ、協力してくれたことはとても大きかったです。

結果、遠征は大成功。生活面も問題なく、サッカー

一も先制される試合が多かったのですが、選手自身が自分たちをコントロールでき、全勝で終わることができました。

昨年は全敗だったことから、ラオスに帰ると空港にはテレビの取材も。日本やラオスでの経験をフルに活かすことができ、良い選手に巡り合えたことは財産になりました。

他にもたくさんの出会いがあり、色々な事がありました。第2回はここまでとさせていただきます。次回はなぜ私が大宮アルディージャで働くことになったのかということを書いていきたいと思えます。



U-14 ラオス男子代表 ブルネイへの遠征